慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スティヴン・リチャーズ・グローバード著 イギリス労働党とロシア革命 : 一九一七年-一九二四年
Sub Title	British labour and the Russian revolution, 1917-1924, by Stephen Richards Graubard
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.2 (1961. 2) ,p.141(65)- 144(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19610201-0065
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610201-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書房新社、世界大思想全集、10、二三五頁。Iggers; Translation, p. 95.

さらに一九四八年にはソ連で、科学アカデミーからサン・シモンの選集が出版されている。

（注17） Doctrine, p. 205. Iggers; Translation, 106. 古賀訳二四四頁。

（注18） Doctrine, p. 190. Iggers; Translation, p. 95. 古賀訳二三五頁。

（注19） Doctrine, p. 190. Iggers; Translation, p. 94. 古賀訳二三五頁。

（注20） K. Marx; Das Kapital, (M-E-L-Institute) Bd. I, S. 348. 長谷部訳五七頁。

（注21） Izlozhenie uchenıya Sen-Simona, translated by M. E. Landau, Moscow, 1947. Introduction by V.P. Volgin, cited by Iggers, Introduction, xlvi.

（注22） Lorenz von Stein; Geschichte der Sozialen Bebewung in Frankreich von 1789 bis auf unser Tage, Bd. II, 1921, S. 230.

（注23） Doctrine, pp. 187-188. Iggers, Translation, p. 92. 邦訳二三三頁。

（注24） Anton Menger; Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag, 1891, S. 68. 森戸訳「近世社会主義思想史」一一一頁。

（注25） 坂本慶一、前掲論文、四三頁。

（注26） K. Marx; ibid., Bd. III. S. 653. 長谷部訳八五三頁。

（注27） Georg G. Iggers; The Cult of Authority, p. 5.

書評

スティヴン・リチャーズ・グローバード著
『イギリス労働党とロシア革命
——一九一七年—一九二四年——』
(Stephen Richards Graubard; British Labour and the Russian Revolution, 1917-1924, 1956.)

このモノグラフは、ハーヴァード歴史研究叢書（Harvard Historical Monograph）の一冊として出版されたものである。この叢書のなかには、エリザベス・アイゼンスタインの「最初の職業的革命家、フィリッポ・ミッシェル・ブォナロッティ——伝記的評論——」をはじめ、多くのすぐれた研究がふくまれており、アメリカの若い研究者の意欲的な労作から成っている点で注目に価する。

本書は、イギリス労働党がその草創期において直面した諸問題のうち、その性格に決定的な影響をあたえるに至ったロシア革命について、その労働党との関係を、政治史的な視野から追求した労作である。本書の全体的な評価や批判に入るに先立ち、その概要についてふれておこう。つぎのような内容から成っている。序論、一、労働党—歴史的な素描、二、労働党と三月革命、三、労働党と一一月革命、四、労働党は干渉に反対する、五、労働党は干渉中止のために行動する、六、イギリス共産党の起源、七、労働党と共産主義者との初期の関係、八、共産主義者と「暗い金曜日」、九、インターナショナル、一〇、労働党、ロシアを訪問、一一、新しいロシアの危機、一二、共産主義者と労働党とのその後の競合関係、一三、政権の座についた労働党と政権を失える労働党、一四、結語。

著者は序文でつぎのようにのべている。「ロシア革命の歴史家は、一九二〇年代および三〇年代においてそれについて書くとき、彼らの主題を非常に狭く限定しようと考えた。彼らは、その事件を、つまりロシア革命をロシアの国土、その大衆だけに関係あるものとしてみたのである……」。このように、従来の、ロシア革命の西欧的な把握の仕方に強い不満を示しつつ、著者は、ロシア革命をそれ自体として研究することの重要性を指摘しながらも、ヨーロッパ社会政治史のなかでの評価という点を力説し、とくに一九一七年から一九二四年までの間におけるイギリス労働党のボリシェヴィキとの関係および英国共産党の創立にともなっておこったその労働党への加入問題などを論ずることによって、労働党のイデオロギーとしての漸進主義とボルシェヴィズムとの根本的な差異を明らかにしようと努力している。

本書については、すでに「サイエンス・アンド・ソサイエティ」誌に、ロンドン大学の講師でわが国にも広く知られているホップスバウム氏が書評を書いている。[2] 彼の論評は、なかなか示唆に富むと同時に手厳しいものがあるが、これについてはのちにふれるとし

て、筆者は、若干違った立場から、読後感ともいうべきものをのべてみたいと思う。

まず本書の特徴は、ホップスバウムもそのブック・レヴィウの冒頭で指摘しているように、資料的にみて、きわめて克明な研究であり、ロシア革命とイギリス労働党に関係あるあらゆる資料が豊富に掲げられ引用されている点で、その実証的な努力にたいしてまず敬意を表したい。本書のなかで、もっとも中心的な部分として著者が力をいれたところは、第五章、第六章、第七章および第八章の各章であると思われる。ここで著者は、労働党の基本的な共産主義対策として、対ソヴェート政策と対英国共産党政策とに分け、この両者のうち、前者については、列国の不干渉反対・ソヴェート政策承認をとなえて「ソヴェートの友」として行動した労働党をとりあげるのにたいし、後者については終始一貫、英国共産党の労働党からの排除政策をつづけた点という相互に矛盾する対内および対外政策を、きわめて対照的な形で把える。問題は、労働党の政策における、いわば「二つの顔」を、著者は、主として英国共産党の戦術的誤謬に帰し、その責任をひたすら共産党の暴力革命論、第三インターナショナルの指令に盲従するかの如き英国共産党の態度のなかに求めている。しかし労働党の政策におけるこの「二つの顔」は、必ずしも英国共産党の失敗にのみ帰せられるべきではなく、労働党が親ソ的であったことを意味するものでもない。周知のように、労働党内部には、最初から第二インターナショナルの戦争反対の宣言を裏切り、政府の帝国主義政策を支持した右翼社会民主主義者――シドニー・ウェッブもそのひとりであるところの――が、指導的な力を保有し、その意味では、労働党は、現実肯定的な機会主義という英国政治伝来の政策のなかにとどまっており、「親ソ的」でありえなかったし、いわんや著者が本書の結語でのべているように、この時期の「ソヴェートの友・ロシア人民の友人」であるというのは、あまりにも労働党の本質を甘くみているというほかはない。たとえばその例として、読者は、一九四九年十月、中華人民共和国の成立後、これをいちはやく承認したアトリー労働党政府が、果して新中国とその人民の友であったかどうか、その後におこった朝鮮動乱に際して、労働党がどのような態度をとったか、この点を考えれば明らかであろう。

たしかに著者が指摘するように、対ソ干渉の停止を政府に訴え、ロシア革命の進展にたいして厳正中立の態度をとることを政府に訴え、その結果、英国政府の反ソヴェート・反革命的な行動にある程度のブレーキをかけたのは、社会主義政党としての労働党の功績であったことは事実であろう。しかし労働党の指導者がボルシェヴィキ革命にたいしてとくに好意的であったというわけではないし、むしろケレンスキー政権の倒壊以後、権力がレーニンの率いるソヴェートにうつるにつれて、次第に冷淡且つ懐疑的となったという事実を顧みるならば、ロシア革命を失敗に終らせようとした英国はじめその他の諸国の干渉政策に労働党首脳をして抗議に起ち上らさせたものとして、ともすれば日和見的となりがちな労働党にたいし、下からの圧力をかけた労働組合の動向、とくにランク・アンド・ファイルの抗議運動がとりあげられなければならない。しかしこの点にかんする著者の見解はあまりのべられていないし、いわゆるリーズ会議についてはふれられているが、その後の大衆の動きについては不充分である。

それから労働党にたいする共産党の加入の問題であるが、これは、主として労働党のイデオロギーと共産主義の理論的対立を労働党も共産党も承認した上で、この上に立って統一戦線の必要上、労働党への加入を要求したものであった。しかし労働党の排除政策によって拒否されたのであって、この間の事情を描くにあたって著者は、英国共産党指導者の労働党にたいする非難だけをとりあげ、それだけを評価して、加入を妨げた有力且つ積極的な原因であるかのようにのべているのは、労働党政策の批判を欠いているという点で、片手落の感をまぬがれることはできない。このような態度は、一九二一年三月、戦時中に政府が争議権の抛棄を代償として労働組合にあたえた産業管理を、不況を契機として経営者に奪回しようとした政府にたいし、鉄道および運輸労働組合、さらに炭坑夫連盟が合同して反対に起ち上ったトリップル・アライアンス（Tripple Alliance）の失敗、いわゆる「暗い金曜日」（"Black Friday"）における失敗の責任を、共産党が、労働党にのみ帰しているのは不可解であるとする点と一致する。度重なる労働党への加入の問題が、絶えずはげしい反対に遭遇しなければならなかったのは、共産党が労働組合の支持をうけることができなかったという共産党自体の組織的弱点に起因することを著者が指摘しているのは正しい。この英国共産党の失敗について、一九二一年の共産主義インターナショナル第三回大会において、「英国共産党は、大衆の党となるところまでいっていない。」と批判されたのは、たしかに共産党の弱点を、もっとも簡潔にあらわしている。しかしそれだからといって、明らかに労働党の指導の誤り、とりわけトリップル・アライアンスにおけるアーネスト・ベヴィンやJ・H・トーマスの日和見的な行動を、共産党が痛烈に非難したことにたいし、共産党の誇大な宣伝であると簡単に片づけてしまうのは当っていない。何故なら、労働組合を支配し、その支持の上に立っている労働党にとって、このトリップル・アライアンスの敗北は大きな失敗にはちがいなかったからである。

著者は、できるだけ資料に忠実に、当時の労働党とロシア革命との関係を再現しようと努力している。しかし労働党に同情的な立場をとろうとする余り、労働党の戦術的な誤謬は、意識的にか無意識的にか、これを暴露するのを好まない傾向がみられる。そして共産党の側からの労働党にたいする攻撃は、これを過小評価しようとするような印象を拭うことができない。著者の立場上やむをえないかもしれないが、もっと労働党の、ロシア革命の勃発とソヴェート政権の樹立を前にしての苦悶、内部的な分裂の様相、労働党左派と共産党との関係などについて、理論的に把握されたならば、豊富な資

料の引用も、さらに生きたであろうと思われる。以上が、筆者の読後感であるが、このような限界にもかかわらず、本書は、きわめて克明な資料的研究であり、イギリス労働運動史を学ぶ者は、一度は目を通すべき労作であるといえよう。

さて、最後にホッブスバウムの本書にたいする批評であるが、ここで彼は、つぎのようにのべている。「本書の弱点は事実にあるのではなくて、ムードにあるのだ。一九一七年から一九二五年までのイギリス労働党の歴史は、若いアメリカの学者が把握しなおすことは、とくにむずかしい。なぜならアメリカ合衆国は、そのようなものは何も知らないし、すでにイギリス労働運動の舞台から姿を没してしまったのだからだ」（傍点筆者）と。この指摘は、やや縄張り意識的な偏見の香りをもっていなければ幸いであるが、ともかくも外国の労働運動史を研究する者にとって教訓的であろう。

（注1）Elizabeth L. Eisenstein; Philippo Michele Buonarroti, 176—1837, the First Professional Revolutionist, 1959.

これについては三田学会雑誌第五二巻第一一号所収拙稿（書評）参照。

（注2）Science and Society, (Spring, 1959) Vol. XXIII, No. 2.

（追記）ほとんど同じ問題をとりあつかった Henry Pelling; The British Communist Party —— Historial Profile, 1959 を一緒に論評する予定であったが、筆者の不手際のために果すことができず残念である。

——一九六〇・一二・一一——（飯田 鼎）

Φ・B・コーニシン著 笠原長寿訳 『ソ連邦の保険 ——生命保険と損害保険の理論と実際——』

われわれが、保険の限界を論ずる際に、理想社会に至れば保険は消滅するであろうとしているが、これはまた理想社会にあらざれば保険はかならず必要であろうということをもうらがきするものである。マルクス経済学者は、一応考えられうる状態での理想社会を共産主義社会としているようであるが、なるほど、「能力に応じて、必要に応じて」の段階では、各人がそれぞれ偶然の災害に備えなければならないという、個人主義的な要素を含む保険はなくなるであろう。しかしながら社会的に、全体として、計画的な考慮に基づく偶然の災害に備える善後策としての保険あるいは保険類似制度、または保険が発達せしめてきた諸技術の一部あるいは相当部分を活用するなんらかの制度は存せざるべからずであろう。ただしかかる人類の発展段階においても、偶然の災害の予防、鎮圧が完全には行ないえないであろうことを条件として。

保険学でいう「危険なければ保険なし」なる原則は、これまた危険あるところ保険あり、あるいはありうるなることをも意味しているであろう。現実にはあらゆる危険がすべてこれ保険をなさしめているわけではない。しかし保険の諸学理が発達し、また保険を実際に成立させ遂行している保険事業体がいろいろに進歩ならびに変化をすれば、保険の実施の範囲は広まり、保険の限界はさらに一段と遠くおしやられていくのである。経済体制が相違してくれば、保険の範囲と限界も変動を来たす。資本主義社会にあってはそれに相応する保険の範囲と限界があり、社会主義社会においてもそれに対応する保険の範囲と限界が考えられうる。しかして危険があるところ、かならず保険の存立の可能性は存在する。社会主義社会にも、各種各様の危険がある。

社会主義社会にも保険が必要であることは、すでにマルクスが、ドイツ労働者党綱領を評註した際に指摘したし、そしてさらに資本論中においては、これを一層強く主張しているが、ソ連邦という社会主義国家が出現して相当の日時の経過した今日、われわれはいまだそこにおける保険の実際は知らされていなかった。ただ資本主義社会でいわれる保険は、私有財産制度が解消の過程を辿るであろう社会主義社会においては、徐々に消滅していくであろうとは、一応臆測されても当然と思われるが、さて社会主義社会にあって、社会保険を別とする普通保険の現状がどのようなものであろうかというところから、本書への興味は始まるのである。

本書の原著者コーニシン教授は、経済学博士にして、保険問題についてのソビエトの偉大なる学者の一人であるとされている。過去十年間、ソ連邦国家保険総管理局副長官の要職にあって、また過去二十年間、モスクワおよびレニングラード大学で、ソビエトの国家保険に関する講座を受け持ち、現在もモスクワ金融専門学校の国家予算講座を担当している。国家保険に関する豊富な著作をもち、科学的研究活動ならびに教育活動と、保険機関における指導的活動とをうまく調和させた一人である。本書によって、始めてソビエトの金融専門学校ならびに大学用の保険教科書が創られたのであると（コーニシン教授の略歴）。

本書の訳者笠原助教授は、マルクス経済学の立場から保険を研究する、保険学界における数少ない純学者派の一人である。同氏の今日までの研究の特徴は、保険の現実の実証分析より始めて、その結果より理論を抽出し、または在来の理論の正当性の確証を得るというその学問的性格である。ソ連邦の保険の理論ならびに現実の研究の先鞭をつけたという点では、同氏の指導教授印南博吉博士に一歩をゆずるとしても、その後の、ソ連邦の保険の紹介では、同氏こそわが国の第一人者である。同氏の下記の諸論文を見れば、このことは自明である。「社会主義社会と普通保険」（明大商学論叢、第四〇巻第六・七号、昭和三十二年七月、明治大学商学研究所）、「外国生